深い河

ディープ・リバー

遠藤周作

深い河

ディープ・リバー

遠藤周作
enjo shusaku

講談社

深い河（ディープ・リバー）
一九九三年六月八日　第一刷発行
著者——遠藤周作
© Syusaku Endo 1993, Printed in Japan

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一二一—〇〇一
電話　出版部（〇三）五三九五—三五〇四
販売部（〇三）五三九五—三六二二
製作部（〇三）五三九五—三六一五
印刷所——株式会社精興社　製本所——黒柳製本株式会社
定価はカバーに表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

目

次

一章　磯辺の場合　7
二章　説明会　41
三章　美津子の場合　49
四章　沼田の場合　107
五章　木口の場合　131
六章　河のほとりの町　165
七章　女神　201

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

八章　失いしものを求めて　235
九章　河　271
十章　大津の場合　293
十一章　まことに彼は我々の病を負い　305
十二章　転生　311
十三章　彼は醜く威厳もなく　329

装幀　菊地信義
カバー絵　小山進

深い河（ディープ・リバー）

深い河、神よ、わたしは河を渡って、
集いの地に行きたい

黒人霊歌

一章　磯辺の場合

やき芋ォ、やき芋、ほかほかのやき芋ォ。

医師から手遅れになった妻の癌を宣告されたあの瞬間を思い出す時、磯辺は、診察室の窓の下から彼の狼狽を嗤うように聞えたやき芋屋の声がいつも甦ってくる。

間のびのした呑気そうな、男の声。

やき芋ォ、やき芋、ほかほかのやき芋ォ。

「ここが……癌です。ここにも転移しています」

医者の指はゆっくりと、まるでそのやき芋屋の声に伴せるように、レントゲンの上を這っ

た。

「手術はもうむつかしいと思います」と彼は抑揚のない声で説明した。「抗癌剤を投与し放射線を当ててはみますが」

「あと」と磯辺は息をのんでたずねた。「どのくらいでしょうか」

「三ヵ月ぐらい」と医師は眼をそらせた。「よくて四ヵ月」

「苦しむでしょうか」

「モルヒネで肉体的な苦痛はある程度除去できます」

しばらく二人の間に沈黙が続き、磯辺が、

「丸山ワクチンを使って、いいでしょうか。そのほか漢方も」

「結構ですよ。よいとお思いのどんな民間薬でも使用されて結構ですよ」

医者が素直に承諾してくれたということは、もう手のうち様のないことを暗示していた。

沈黙がまた続く。耐えられず磯辺は立ちあがると、医師はレントゲンの方にもう一度、体を向けたが回転椅子の嫌な軋みが磯辺には妻の死の予告に聞こえた。

(俺は……夢を見ている)

エレベーターまで歩いていく間、まだ現実感がなかった。妻が死ぬ、ということは彼の想念に一度も昇っていなかった。映画をみている最中、突然、まったく別のフィルムが映し出された感じである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

冬の夕暮れの、鉛色の空を茫然と見た。また外でやき芋屋の声が聞える。ほかほかのやき芋ォ。妻にどう嘘をつこうか、頭のなかで探し求めた。病人の鋭敏さで妻は磯辺の心の動きをすぐ見ぬくだろう。エレベーターのそばにある椅子に腰をおろした。二人の看護婦が楽しげに話しながら通った。彼女たちは病院で働いているのに病気や不幸とはまったく関係のない健康と若さとに溢れている。

息を深く吸いこんで、病室のノブをぐっと握った。胸の上に片腕をのせて妻は眠っていた。たった一つしかない丸椅子に腰かけたまま、もう一度、頭のなかで組みたてた嘘を反芻した。妻は眼を物憂げに開き、そして夫をみて弱々しく微笑した。

「お医者さまに会った？」

「ああ」

「お医者さま……何とおっしゃっていました？」

「三、四ヵ月は入院しなくちゃならない。でも四ヵ月後にはかなり良くなると言っておられる。だからもう一寸の辛抱だ」

嘘の下手さが自分でもわかるだけに額にかすかに汗がにじむような気がした。

「そう……」

妻の視線が彼の湿った額に向けられている。磯辺は病人の敏感な勘を警戒した。

「じゃ、あと四ヵ月も、あなたに迷惑をかけるのね」

「馬鹿いうな。迷惑もへったくれもあるか」
彼女は微笑した。こんなやさしい言葉をこれまでの夫から聞いたことがなかったからだ。妻特有の微笑。結婚当初、人間関係にくたびれて会社から戻ってきた磯辺が、玄関をあけると、彼女はこの包みこむような微笑をうかべ、彼を迎えたものだ。
「退院したら、しばらく静養して、すっかり良くなったら」今までこの女を粗略に扱ってきたうしろめたさを匿すため磯辺は更に嘘を重ねた。「温泉にでも行くさ」
「そんな、お金のかかること、わたくしに必要ないわ」
必要ないわ、という言葉には、外で遠くから聞えるやき芋屋の声と同じような微妙な寂しさと哀しさとがまじっていた。ひょっとしたら彼女、何もかもわかっているのじゃないか。突然、妻はひとりごとのように、
「さっき、あの樹を見ていたの」
病室の窓に向けられた妻の眼は遠くに何かを抱くようにあまたの枝をひろげた銀杏の巨木に向けられていた。
「あの樹、どのくらい生きてきたのかしら」
「二百年ぐらいじゃないか。とに角、このあたりで一番、古い樹だろう」
「あの樹が言ったの。命は決して消えないって」
元気な頃も妻は毎日、ベランダの花に水をかける時、少女のように、ひとつひとつの鉢に話

しかける癖があった。
「うつくしい花、咲かせてね」「うつくしい花、有難う」こんな会話をするのは、やはり花好きだった母親から習ったもので、結婚したあとも、この習慣は直らなかった。だが銀杏の老樹とそんな会話をとりかわしたのは、彼女が本能的に自分の生命の翳りを感じているためかもしれない。
「こんどは樹との会話か」と彼は不安をかくすためせせら笑ってみせた。「とに角、結構じゃないか。病気は見通しがついたし、銀杏とは毎日、話しあいができるし」
「そうね」と妻は気のない声で答えた。そしてそれに気づいたのか、やつれた頬を指でなぜた。
チャイムがなっている。面会時間が終ったことを告げる病院の合図である。彼はよごれものを入れた紙袋を手にもって丸椅子から立ちあがる。
「では、帰るか」
彼はわざと欠伸をしてみせると片手を出して妻の手を握った。こんな照れくさい事は入院まで一度もしたことはない。日本人の多くの夫のように、彼は妻に愛情を具体的に示すのが恥しい。手首は確実に細くなり、死が微妙に病人の体内に拡がっていることを示していた。彼女はまたあの微笑を夫にかえし、
「ちゃんと、食事をしているわね。洗濯物は母に渡してくださいよ」

「やっているよ」

廊下に出たが、胸は鉛をつめこまれたようだ。

部屋の隅で音を小さくしたテレビがくだらないゲームを放映している。四組の若夫婦がそれぞれ大きな骰を投げて、合計点が十になればハワイへ二泊三日の旅行に行けるという番組だ。

眠っている妻のそばで、ただ茫然とその画面を眺めていた。十の合計点を出した一組の夫婦が手を握りあって悦んでいる。彼等の頭上から細かい紙が舞いおちてくる。

磯辺は誰かが部屋の何処かで嗤っている声を聞いた。その誰かは彼を更に苦しめるため、わざと倖せな別の夫婦の姿をテレビで見せつけているように思えた。

長年の間、仕事や人間関係で当惑したり、途方に暮れたことも多い磯辺だったが、今、この瞬間、彼がおかれている状況はそんな生活上の挫折とはまったく違って次元を異にしていた。眼前で眠っている妻が三、四ヵ月後、確実に死ぬのだ。それは磯辺のような男が今まで一度も考えたことのない出来事だった。重かった。彼はどんな宗教も信じていなかったが、もし神仏というものがあるならば、こう叫びたかった。(どうして、こいつに不幸を与えるんです。女房は善良で、やさしい、並みの女です。助けてやってください。お願いです)

ナースセンターで顔なじみになった田中と言う主任看護婦が、カルテに何かを書きこんでい

たが、顔をあげて、同情のこもった眼で会釈してくれた。
荻窪の家に戻ると、台所では近くに住んでいる妻の母が冷蔵庫に夕食を入れている最中で、彼は病状を報告したが、医師の言葉は曖昧にした。義母が真実を知ったら、どんな衝撃をうけるかと思うと勇気が出ない。
「今日はお父さんが早く戻るので、わたし帰りますよ」
「有難うございました」
「あの子が入院すると、なんだかこの家、急に広くなりましたねえ」
「根があかるい女ですからねえ」そして彼はさっきと同じように心のなかで神仏に訴えた。
(あいつは平凡だが善良な女です。あいつぐらい助けてやってください)
姑が帰ると、彼女の言ったように、今までは考えもしなかった家の虚しさがこたえた。妻がそこに存在していないせいだった。一ヵ月前まで磯辺は妻が家にいることを当然のように思い、特別にその存在を意識したこともなければ、用がない時にこちらから話かけたりしたこともなかった。二人の間には子供ができなかったので、一度、養女をもらった事がある。結局は、なついてもらえず失敗をした。どちらかと言うと口数(くちかず)の少い磯辺は妻や養女にやさしい言葉をかけたり、自分の気持を表現するのが苦手だったのだ。食卓でもしゃべるのは妻で、彼のほうは「ああ」「それで、いいだろう」ぐらいしか受け答えをせず、彼女から溜息をつかれて、「もっとあの子(養女)に話ができないの」とたびたび咎められたものだ。

彼が妻と話をかわせるようになったのは彼女が入院して以後である。

医者の予告は残酷なほど正確で予告を受けてから一ヵ月もたたぬうち、妻は熱を出し、体中の痛みを訴えはじめた。それでも夫に辛い思いをさせないように懸命に微笑をうかべようとするが、放射線治療のあと、頭の毛がぬけ、体を少しでも動かすと、稲光のように激痛が走るらしく、かすかな呻き声をたてた。抗癌剤のため食べたものもすぐ吐く。

「モルヒネを使って頂けないんですか」

たまりかねて医師に懇願すると、

「ええ、でも適切に使わないと死期を早めるんです」

と医師はいつかと矛盾したことを言った。延命医学を主流とする日本の病院では、一日でも患者の生命を引きのばすことを方針としている。磯辺の心にも結局はこんな治療では助からないのだと承知していても、妻に一時間でも一分でも長く生きてほしい気持がかくれている。しかし、夫に申しわけないとおもってか、痛いと口に出すまいと歯を食いしばっている啓子の忍耐を思うと、彼は「もういい、もういい」と言ってやりたかった。

だが、ある日、会社の帰り、いつものように病室のドアをあけると、思いがけなく妻が笑顔をこちらにむけて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo